

伊豆市未来づくり 個別セッション

「次代を担う人づくり」 第2回(2014/8/17 実施) 発言要旨

(敬称略)

座長	相模女子大学学芸学部 子ども教育学科教授	久保田 力
有識者	小田原短期大学保育学科准教授	菊地 篤子
市民代表	修善寺温泉場まちづくり検討会	原 京
	社会教育委員長	澤木 育子
	子ども子育て会議	梅原 龍一
	静岡グッドトイ委員会代表	田足井 みさ子
	NPO 法人伊豆市リトルシニア監督	土屋 英治
	伊豆市議会議員	青木 靖
	行政改革推進委員	佐藤 傳
	行政改革推進委員	宮地 あけみ

【ゲスト(地元高校生)】

静岡県立土肥高校

商業科3年	南條 正和	伊豆市の特産品をどうアピールするか
商業科3年	鈴木 萌	街の発展について(小売店の減少等)
普通科3年	三浦 智之	伊豆市の子どもがどうしたら戻ってくるか
普通科3年	牛尾 直人	高齢者の長所と短所について

静岡県立伊豆総合高校

総合学科3年	高田 優輝都	伊豆総合高校生徒会の活動
総合学科2年	佐藤 文音	伊豆市の観光について思うこと
総合学科3年	澤田 李央	PBL 学習について

市長 ○数日前に静岡県のある新聞社から「学力テスト結果の公表」についてアンケート調査が届いたが、この問題が政策課題の中で優先順位がそれほど高いのか、どれほどの意味があるのか、私は疑問に思っていて、いつも同じように回答している。

○私自身が受けた教育を振り返ってみると、国語や算数ではなく、中学時代に野球を3年間続けたものの中学校体育連盟の大会で1回戦で負けたこと、高校では野球部を2か月で辞め大学では4か月で辞めたこと、レギュラーになれそうもなく苦しくなって辞めたことを今でも反省している。読み書き、算盤ももちろん必要だが、そのほかにも重要な教育がある。

○本日は、市内にある土肥高校と伊豆総合高校に通う高校生をゲスト発言者としてお迎えした。このセッションに参加してくれる委員は私が自信を持って薦める伊豆市で活躍している方々で、生徒の皆さんのお手本になる市民の皆さんである。本日のセッションでは、主権者である高校生の皆さんの意見を伺って、これからの参考にさせていただきたい。

座長 ○今日は「次代を担う人づくり」というテーマに合った、素晴らしいゲストとして伊豆市の高校生の皆さんをお迎えした。このセッションのテーマは次世代ではなく「次代」なので、小・中・高校生も含まれている。それなのにこれまでは大人だけの議論で、これに対して私自身は疑問を投げかけてきた。本日は大人に一番近い世代である高校生から、まず伊豆市に対する期待についてお話しいただきたい。伊豆市のことを単に褒めるのではなく、高校生の目で見、こう変わってほしい、こうした観点からの意見も伺いたい。

○三浦(土肥高校、3年) ○伊豆市の中でも土肥の子ども達がどうしたら戻ってくるか、そのためには何が必要か、という観点で話したい。人々が土肥に住んでいるのにはたくさん理由があるが、中でも皆が毎年楽しみにしているのが「天王祭」がある。この祭りを楽しみにして年に一度土肥に帰ってくる人もいほどで、天王祭があることで土肥の地に愛着が湧くことは確かだと思う。この祭りを最高に楽しむことができれば、土肥に帰ってくる子ども達が増えるのではないかと考える。

○では、どのようにして祭を楽しむのか。祭りは幅広い年代の人々が参加することで成立するもので、幅広い年代の人々と直接対して、一緒になって楽しむことができれば祭りを最高に楽しむことができる。しかし、子ども達の一部は現在これができなくなっている。その理由はコミュニケーション能力の不足にあって、幅広い年代の人々と話すことができない子どもが多い。ゲーム機が発達したことなどがあって外で遊ぶ子どもが減って、スポーツをせず家の中で1人ゲームをする子どもが増えた。これがコミュニケーション能力の足りない子どもが増えた原因だと考えている。○この問題に対応するために、ゲーム機を取り上げる、外で遊ばせる、といったことをしたのは問題が解消しない、無理やり子どもに何かさせることはむしろ逆効果になる。私が考える対策は、子どもに団体競技の楽しさを教えることである。団体競技に参加すれば嫌でも会話するの必要があり、たくさん会話することによってそのチームが強くなる。団体競技をする人でコミュニケーション能力が不足している人を私は知らないし、たとえいたとしても非常に少数である。子ども達に対して、無理やりダメというのではなく、教育を通して団体競技の楽しさを教え、団体競技が楽しい、運動することが楽しいことを教えることができれば、自然と外で遊ぶ子どもが増える。それによってコミュニケーション能力が向上し、祭りなどの地域行事をもっと楽しむことができ、土肥に愛着が湧き、帰ってくる子どもが増えると私は考える。



○この場を借りてもう一つ話したい。私の母校である土肥中学校では来年、野球部を廃止するという話が最近持ち上がっている。先に述べた理由から私はこの意見に断固反対する。過疎等の理由で子どもが減少し、部で試合ができなくなるのは仕方のないことだが、だからといって多くの部員が必要だという理由だけで野球部を廃部にするには納得できない。

土肥には少年野球チーム・ビーチボーイズがある。少数ながらも勝利を目指して日々練習する子ども達がいる。土肥中学に野球部がなくなったらそれ

まで頑張ってきた野球ではなく別のスポーツをすることになったり、野球をしたいために別の中学に通う子どももでてくる。それこそが土肥を過疎化する原因になる。人数が足りなければ別の中学との共同チームにしたり、他の部活から助っ人を借りる、こうした方法で部を存続させることもできる。事実、過去の事例を見ると、他の部活から人を借りて存続させてきた部もある。土肥中学にある、唯一の団体競技である野球部をなくせば、これがまたコミュニケーション能力不足を招く。○土肥中学には運動部は野球部とテニス部の2つしかない。中学時代にテニス部だった友人が高校でバスケット部に入部したところ、バスケの方が楽しいことがわかったと話している。こうしたことから今まで継続して活動してきた団体競技の野球部を、いとも簡単に廃部にするのはどうかと思う。

座長 ○三浦君からは、祭り、団体競技といったキーワードが指摘された。

佐藤(伊豆総合高校、2年) ○伊豆市は有名な観光地で、自然や温泉があって富士山も見える。このように、いいところ取りした観光地なので旅行には打ってつけの場所で、この夏も多くの観光客が修善寺駅から訪れている。友人同士、カップル、家族連れ、夫婦、実にさまざまな人たちがやってくる。このように魅力的な場所だが、近年は若者離れや人口の減少の問題が指摘されている。

○伊豆市でしばしば耳にするのが、交通の手段が不便だという問題である。私が住む中伊豆ではバスが1時間に1本しかなく、かなり不便である。交通の便が悪いため人が離れていってしまうのではないかと考えている。東京では3分に1本の割合で電車が来るという話を聞くと、それは羨ましい限りで、バスが来ないときに迎えを親に頼もうとしても親が働いている時も多く、待つしかないのが現状である。



座長 ○佐藤さんからは、観光、交通の手段、の2つのキーワードが示された。

牛尾(土肥高校、3年) ○高齢者の長所と短所について話したい。私がアルバイトをしている海の家経営者は80歳くらいの高齢者夫婦である。最初は優しく接してくれていたが慣れてくるとあたりが強くなってきた。私がミスをしたときにはキレるのに、高齢者がミスしてそれを私が指摘すると文句を言われて、高齢者はとても理不尽だと感じた。私が一つの仕事に取り組んでいる時に次の仕事を仕掛けてきて仕事にし難くなったり、物忘れが少し行き過ぎていて同じことを何度も繰り返したり、といった短所がある。長所としては、忙しい昼時が過ぎた後にかき氷を出してくれて昔の話を聞かせてくれた。昔の話を聞くことは為になると思う。高齢者は昔のことなどをいろいろ知っていることから必要な存在だと思う。



澤田(伊豆総合高校、3年) ○伊豆総合高校で実施しているPBL学習(Problem Based Learning)について話す。和訳するとPBLは「問題解決型学習」で、身近な問題や事例を素材としながら、具体的な問題解決に向けてチームで進めていく学習方法である。伊豆総合高校では、必修科目の「産業社会と人間」や総合的な学習の時間、自由選択科目の「地域と産業」などでPBL学習が用いられている。



○PBLでは、問題点やその解決手段を自ら見出す力を培う、問題を解決する達成感が得られる、プレゼンテーション能力やイベント能力が向上する、こうした成果が期待できる。グループ学習では、コミュニケーションを円滑に進める力を高める、リーダーシップ力を向上させる。能動的な学習方法であり、社会に出た時に役立つ人間の育成にもなる。PBLでは、先生方から大きなテーマを課題として与えられたり、自分たちで問題を考えてテーマにする。こうしたテーマに対して4-5人の少人数グループで、生徒自ら資料を集め、意見を出し合い、どのようにしたらこの問題を解決できるかを見出していく。PBLでは大人と話す機会も多く、大人とコミュニケーションを図る能力も身に付けられる。自分の意見をいかに上手に伝えられるかといった社会に出た時に役立つ能力を養うことからPBL学習は効果がある。

○伊豆総合高校のPBL学習の対象は、主に伊豆市についてであり、「伊豆市の観光」や「伊豆市の少子高齢化問題」といった生徒が問題と考える課題に対してグループで進めていく。私自身がこのような場で話すことができるのも、PBLを通じて身に着けた能力で、PBL学習がさらに広まれば良いと考える。今回のセッション・テーマである「次代を担う人づくり」に必要な能力を育てるためにもPBLは良い方法であるといえる。

座長 ○「次代を担う人づくり」に対して、課題解決のための学習方法であるPBL学習がいろいろな形で取り入れられないか、というのが澤田さんの提言。高校生が実際に考えている問題の方が、このセッションでの話よりも進んでいる可能性がある。伊豆市について具体的にどのような問題をPBLで取り上げているか、次に伺いたい。



鈴木(土肥高校、3年) ○街の発展から私は、活気ある街にしたいと考える。現在は小売店の減少などあって活気があるとはいえない。小売店を再び増やして活気ある街にするためには観光客を増やす必要がある。そのためには観光客が利用するバスや電車などの交通の便をもっとよくなるべきだと思う。そのほかにも改善すべきいろいろな問題を見つけて改善していったら、現在より賑やかだったと思われる昔の街に戻していきたい。

高田(伊豆総合高校、3年) ○伊豆総合高校の生徒会長で、三島市から通学している。伊豆総合に3年間通学し、生徒会長でもあることから伊豆市民よりも詳しく知っているところもあり、外の



目で発言したい。伊豆総合では授業の中でも地元に関差した活動が多く取り入れられていることをまず話したい。

○生徒会活動に、毎月実施している「修善寺大掃除」がある。伊豆総合の生徒会を中心に、NPO サプライズ(飯倉清太代表)とともに修善寺駅前を清掃する活動で、土肥高校にも以前に参加してもらったことがある。修善寺大掃除は伊豆総合の生徒会活動ではコアなもので、この活動ではコミュニケーション能力が大きなポイントである。ただ掃除をするだけではなく、団体の活動として多くの人々が集まって一緒に清掃する。小さな子どもから高齢者までいろいろ

んな世代が集まる、他にはあまりない特徴的な活動である。高校生が小さな子どもや高齢者と関わることは実際にはあまりなく、こうした機会が知識の深さや考え方の面で大きな違いを生むと考えている。高校生だけで授業を受けていると、若い者なりの考え方があるとはいえ、高校生だけの意見に凝り固まってしまうところがあるので、高校生よりも若い小学生や中学生と話ができる空間があるという意味でも大掃除は一役買っている。生徒会の中でも仲良しの友人同士で活動したいという生徒もいるが、修善寺大掃除では生徒会がリーダーシップをとってできるだけ幅広い年代の人と組めるよう、くじ引きで相手を決めている。私は 1 年の時から参加してきたので、知合いもかなり増えた。

○「次代を担う人づくり」の観点で修善寺大掃除は、若者が地域に関差した活動が毎月実施される点で意味がある。1 回限りの開催ならば案外簡単だが、毎月開催するには、案、人員、協力者、人を集める力、資金、意欲などが必要で、次回で 31 回目の開催を数える。生徒会長は半年ごとに交代するが、現在 7 代目である。

○修善寺大掃除は他校の高校生との交流にも役立っており、ここから発展した活動に伊豆箱根鉄道沿線の高校約 7 校が参加する「高校生サミット」がある。三島南高校で第 1 回が開催され、各校の生徒会が集まって意見交換した。各校が持つテーマや課題には若干違いがあり、伊豆総合では地域や連携といった地元に関差した活動が課題となっているが、他校の生徒会では、文化祭や学校が抱える問題に関心があった。そのほかボランティアなどについても話し合った。さらに沿線の高校で文化祭のコラボレーションの話も持ち上がっている。伊豆市のほかに、三島市、伊豆の国市、函南町に関わるので、多くの人に知ってもらう必要があり、そのためにはコミュニケーション能力の先にある情報発信能力がカギになると考えている。

○PBL 学習などで 3 年間、地域活動に携わってきたと思うのは、情報発信能力が足りないことだ。自然や人など伊豆市が持っているものはとてもいいのに人が来ないのは、情報発信能力が不足しているからではないか。近所づきあいといった地域のコミュニティが薄くなってきているのは悲しいが仕方がない面もあって、地元はコミュニケーション能力で補えるが、もっと多くの人に知ってもらうにはインターネットを活用するよう提言したい。昔と同じような方法ではなく、メジャーな宣伝方法になったインターネットのほかにもいくつかの情報発信手段を持って、使いこなし活かしていくことだ。生徒会ではこうした活動を広めようとして、FM IS で週 1 回金曜 16:30 からの番組を持って、伊豆総合の地域に関差した活動を紹介している。コミュニティ FM なので発信先は伊豆市内に限られるが、市内の人であっても学校の中のことを知る機会はほとんどなく、また一般の生徒が伊豆市のことを深く知る機会も多くはない。こうした問題意識から情報発信に着眼点を置いて活動している。

座長 ○伊豆市では情報発信には取り組んでいるものの、ネットワークが構築できていないという問題点が前回のセッションで指摘された。高校生サミットの話も興味深い。いろいろな世代が参加する、修善寺大掃除の活動も参考になる。



南城(土肥高校、3年) ○伊豆市の特産物のアピール方法について話したい。伊豆の特産物として有名なのが椎茸やわさびだが、これは伊豆市に住んでいるから知っていることであって全国的には必ずしも広まっていないと思う。土肥には、土肥でしか育たない白びわがある。白びわが全国的に広まらないのは日持ちがしないために売り物にならないことが原因で、そこで土肥高では白びわの葉を使って白びわ茶を作ろうとしている。まだ企画段階で今後どのように進展するか、わからないが、うまく商品化できれば土肥をアピールすることができる。このほかにも海産物など伊豆の特産物を使ったオリジナル商品を開発すれば伊豆のアピールになる。

座長 ○高校生の皆さん、発表、ありがとう。先ほどインターネットからの情報発信について話題になっていたが、この点から委員の原さん、いかがか。

原 ○修禅寺の寺の前で茶店を営んでいるが、この店を始めるにあたって自分たちからはインターネットで宣伝をしないという方針で開始した。いろいろな考え方があると思うが、私の店は修善寺温泉に来たお客様が立ち寄ってくればそれでいいと考えていて、自分たちでは一切インターネットから情報を発信していない。



○ところが不思議なことに勝手に情報を載せてしまう人がいる。ぐるなびといった紹介サイトもあるが、お客様も自分のブログで評価してくれる。私は修善寺温泉に相応しい、昔ながらの茶店にしたいので、情報発信は一切しないが、時代がそれを許さなくなって周りから発信されてしまっている。参考にはならないかもしれないが、こうした現実もある。

座長 ○テレビの取材を一切受け付けない店に行列ができる、こうしたことも起きる。何でもかんでもインターネットに載せればいいわけではなく、インターネットで情報宣伝することが絶対の方法でもない。

菊地 ○高校生としていろいろ考えていることをとても嬉しく思った。高校生が発表したテーマとは少し離れるが、このセッションでは帰属意識について考えてきた。帰属意識があれば希望が持てるが、少ないようだったらそれは大きな問題なので、生徒の皆さんが自分が住んでいる土地に愛着を持っているかについて尋ねたい。自分が住んでいるところに戻ってきて子育てしたいか、親から自分が住んでいるところのいい点を聞いて育ったか、この2点について簡単でもいいので生

徒の皆さんに伺いたい。

南城 ○親からあまり話をされたことはないが、18年間ずっと土肥で育ってきたので、土肥にいるのが当然で、土肥にいることで落ち着く。土肥から出ようとはあまり思わない。少なくとも伊豆半島の中で納まりたい。

鈴木 ○私も親からあまり聞かされてこなかった。私は伊豆市から都会に出たいと思っていて、人と上手くコミュニケーションをとれるよう成長したい。私が住んでいるのは湯ヶ島の持越で山ばかりでまったく何も無い。嫌なわけではないが出たら多分戻ってこないと思う。都会に憧れがある。

三浦 ○私は進学するので高校を卒業したら土肥を一旦は出るが、教員志望なので、教員になって土肥に戻って子ども達が少しでも地元を離れないようにしたい。18年間土肥で育ってきて、土肥のいいところも悪いところも見えてきたが、それでももっといいところになりたいという気持ちが強く、土肥から離れたくない。

○親から土肥について直接何か言われたことは今まで一度もないが、私が親になったら土肥のいいところを教えるつもりだ。私は、気が付いたら地域の少年野球チームに入り、和太鼓をやっていた。何も言われたわけではないが気が付いたら土肥に関係する何かをやっている、それを通じて土肥が好きになった。少年野球チームに入れてくれて和太鼓をやらせてくれて、それで土肥に対する愛着が湧いたことは確かだと思う。

友人にも同じような考えの人がいる。大学では都会に出て勉強する、外の世界を見てから、土肥に帰ってきて公務員になって土肥を良くしたいと言っている。中には迷っている人もいるが、私は友人には「土肥はいいよ」と伝えるようにしている。

座長 ○先ほど三浦君が話したように、年に1回であっても祭りがある、それでふるさとを実感する、この話を感心して聞いていた。一回外に出て外で学んだことを土肥に帰ってきて活かす、そうした人が一人でも増えればいい。

○我々の世代では、特に長男は戻ってくるという親からのプレッシャーがあって結果的に私も清水町に戻った。最近の親はそうしたことを子どもに言わないのか。



牛尾 ○そうしたことを親から言われたことはない。親からは自分の好きにしろと言われている。私は都会に出たら、伊豆市には帰らないかもしれない。

座長 ○三島在住で伊豆総合に通っている高田君はどうか。三島と比べながらでもいいので、伊豆市に対する地元意識のようなものはあるか。

高田 ○将来的には私は伊豆市からも三島からも出たい。三島は十分交通の便もよく、企業も多く、いいところだと思うが、私はもっと外に行きたい。このセッションが伊豆市を内側から変えていく場だとしたら、私は外側から変えていける人間になりたい。伊豆市を内側から活性化することも必要だが、テレビに出て(伊豆市などを)宣伝するのが私の一番の目標。観光が拡大してきているので、田舎っぽい地元っぽいところを宣伝する、三島市や伊豆市を外側からプロデュースする、外側から世界を変えていく存在になりたい。

佐藤 ○私は中伊豆で安定して住めるようになるまでは、一旦は外に出て、運転免許も取って、就職に困らなければ中伊豆に戻ってきたい。私の家では農業もしているので野菜も作れる。中伊豆でほのぼのと暮らして、母のようにこのあたりで働いて安定した生活を送りたい。高田さんみたいに世界征服のような考えはない。

澤田 ○私は修善寺に住んでいて高校を卒業したら就職するが、修善寺の温泉旅館に勤めて、ずっと伊豆市に住んでいきたいと思っている。伊豆市にはいいものがたくさんあるのに、少子高齢化で多くの若者が離れていく問題がある。こうした中でも私が伊豆市に住みたいと思ったのは、伊豆総合高校で伊豆市のよさを学んで、もったいないなと思うようになったことがきっかけである。

座長 ○澤田さんの話を聞いていると、PBL 学習はどこでもやらなければならないと感じる。葎山高校でも伊豆中央高校でも、高校ならばどこでもある程度の広いエリアから生徒を集めている。授業の中で地元について深く学んだことで伊豆市のよさを認識することができたわけで、そのひとつの結果として地元で働きたいという希望に結びついた。澤田さんのような人が育つのであれば、とても心強い。

澤木 ○まったくそのとおりで私もとても嬉しい。3年間 PBL 学習で勉強してきて(地元で就職する)考えが固まった、伊豆市に残って旅館で働きたいと考えるようになった大きなターニングポイントになったのは何か。具体的にどのような学習でそのように考えるようになったのか。

澤田 ○伊豆市の少子高齢化問題をどうしたら解決できるか、という大きな問題から私は考えていった。若い人は都会に出たいという気持ちが強い人が多いが、それは地元にもいいものがあることが見えていないからで、ずっと住んできた中でこれが普通だという考えが根付いてしまっていて気づかないからではないか。PBL で少子高齢化問題に取り組んだときに、私はまず伊豆市にある良いところを調べて、その次に良くないところ、交通の便が悪い、山しかない、といった点を調べた。その上で、ここにあるいいものを寂れさせてはいけないという思いが強くなった。伊豆市全体でみれば、こんなにきれいな景色があって、温泉があって、歴史がある。人が少なくなると観光

業が寂れて、このあたりの商店もシャッターが閉まっているところも多く寂れてきている。PBL 学習をしても伊豆市に残りたいと考えるようになった人はそれほど多くはないと思うが、それまでの私は将来やりたいことがはっきりしていなかったのも、何もすることがないよりは自分の地域を良くしていきたい、このように考えるようになった。他の人にここに残ってほしいと言うのではなく、他人の見本とまではいかななくても、こんな生き方もある、それを見せたい気持ちになった。

座長 ○鈴木さん、観光客を増やすために具体的なヒントがあれば大人達に教えていただきたい。

鈴木 ○先ほども言ったように、交通の便をよくする、伊豆市をアピールする施設を造る、人との出会い、周りにはない特別なものを作ることだと思う。

座長 ○人で観光客を呼び込もうとしたら、どんな人づくりをすればいいと考えるか。簡単なヒントでいいので、こんな風になった方がいいといった意見はあるか。

鈴木 ○伊豆市民が観光客に伊豆市のいいところを伝える、人と人のふれあいで観光客を増やせるのではないと思う。土肥から湯ヶ島に帰ると、土肥には人がいるが、湯ヶ島ではほとんど人をみかけない。これでは他人に伝えられないのではないと思う。

座長 ○高校生の皆さんも疲れたと思うので、ここで一旦休憩したい。前半、高校生からいろいろな意見が出されたが、これに対して菊地市長から前半を締めくくる一言をいただきたい。

市長 ○伊豆総合高校でPBLが、どういった目的で、どういった内容で進められているか、どういった教育がされているか、最初から関心を持って見ていた。(名札を掲げて)これは単なる名札だが、こちら側から見れば四角形、こちら側から見れば三角形に見える。ネットで調べてもわかるように世の中にはたくさんの情報があるが、それをどのように分析するか、それは見る人の視点によって変わる。ある人が見れば四角で、他の人が見れば三角に見える。



○モノを見る視点は見る人によっても異なる。行政では事業の目的で見るので、目的によって見え方が変わる。このセッションでは伊豆市の将来について考えるが、これを人材育成や人づくりの視点から見ていく。伊豆総合のPBLの話聞いて、高校生なので課題を整理する手法にはまだ初歩的な面もあるが、高校の学習が深いレベルに入ってきていることを痛感した。もう少し整理をさせてもらえば、生徒の皆さんからさらにいろいろなアイデアが出てくるように思う。それを期待したい。

○このセッションを始めた背景には伊豆市から若い人たちの流出が激しいことがある。そしてさらに辛いことだが、伊豆市で生まれた子どもが0歳から14歳になるまでに減っていくことがあげられる。結婚して子どもを持ったら伊豆市から出てしまう人がいる問題がある。子どもが少ないのは、子どもの問題だけではなく、子育て世代である30代の大人の問題でもあり、社会の問題でもあるといえる。

○(休憩の後に)もう少し続けて、問題を掘り下げて考えていきたい。大人の意見だけではなく、高校生の考えももっと伺いたいと思う。

< 休憩 >

座長 ○第1回目セッションでは、伊豆市は恣意的に作られた市なので、旧4町が有機的なつながりを持っているか、この点について話し合ってきた。もともと「人づくり」という抽象的なテーマで議論するセッションだが、座長メモや複数の委員の方々からいただいたメモの中ではキーワードとなる提言がいくつか示されている。これから何をするのか、何をすべきなのか、の観点から委員から具体的な提言をいただきたいといった意見もある。フロアからも内容を絞ってほしいといった提案も示されている。

○まずは前回から今回に至るまでにいただいた委員メモの内容から紹介していきたい。菊地先生、まず口火を切って発言いただきたい。

菊地 ○前回いろいろな取組が紹介されたが、その多くは枠だけであったように思う。私は人間関係と発達が専門で、人間は本来、最初に家庭で育ち、次に地域で育ち、そして第三段階では集団の中で社会性を育む構造になっている。ところが最近では、これは伊豆市に限ったことではなく全国的にもあてはまるが、第二段階の地域での育ちが少ない、あるいは無い傾向にある。この中では家庭での帰属意識が根本的な問題であり、それをいかに地域や集団につなげていくかが問われている。



○小学校で地域社会や総合的な学習の時間で勉強し、中学や高校でも地域に関わる学びや活動などもあるが、それぞれつながってなくて分断されていることが問題なのではないか。同じ市の中でも隣の学校で何をしているか知らない、子ども達が地域について学ぶときに、授業は授業、地域活動は地域活動、子ども会は子ども会と別々で、地域学習としての連続性がないように思う。これは横のつながりの問題である。

○次が縦のつながりだが、学校や行政などが家庭に向けてきちん

と発信する必要がある。こうした話を家庭でもしてほしい、といった内容で発信して家庭とのつながりを大切にすることだ。新しく何かに取り組む必要はなく、あるものを上手につなげる、これが出来ればいいのではないか。

○私が 10 数年来進めている「みんなで子育て」活動を通してわかったのは、日本では子育てに関して教わる機会があまりないまま大人になって子育てが始まってしまうことがある。小学校では総合で、中学、高校では家庭科や保健体育などで少しは学び、また静岡県では高校で幼稚園、保育園、こども園のいずれかを 1 日訪問して保育を実体験する、保育体験の授業が組み込まれている。しかし、この保育体験でも当日に幼稚園などに行って体験して、それで終わりとなっている。親になるには国家資格は必要ないので、子どものことをほとんど知らないまま子育てが始まっていて、これに対応するのが保育体験だが、伊豆市ではもっと丁寧に子育てを伝えられる、こうした伊豆市であってほしい、これが私の願いである。

○私は大学教員になる前に伊豆市で保健師とともに乳幼児健診などで巡回し、伊豆市の子ども達の様子を実際に見てきた。三島市、伊東市、函南町などと比べても伊豆市の保健師のパワーは大きく、保健師が数人集まるだけで伊豆市の子ども全員のことが把握できる。人口が少ないことから父親や母親一人一人に対応できる、行政と密接な関わりを持って子育てができるところが伊豆市の特徴である。教育現場でも双方向の取り組みができる少人数教育が有効であることは従来から指摘されていることで、子どものことを一対一で考えてくれる伊豆市としてこれを広めて、少人数の良さを保護者に伝える、こうした人育ても大切ではないか。

○前回セッションで指摘された、若者の意見が反映されないとの意見には、そもそもどのくらいの年齢の人を若者というのか、はっきりわからなかった。若者の意見が取り入れられないのは仕方ない面もあるが、言っても無駄なわけではないこと、取り入れられなかった理由や根拠がわかること、取り入れなかった理由が明らかになること、組み込まれない理由がわかって納得すること、こうしたことが実現できるオープンなシステムがあればいいのではないか。

座長 ○佐藤さんからもメモをいただいたので説明をお願いしたい。

佐藤 ○「目指すべき伊豆市民像」について、まず提案したい。伊豆市の学校教育目標では、「ふるさと伊豆に誇りを持ち、夢やこころざしをもって、心豊かに生きる子どもの育成」が掲げられているが、この内容についてももう少し詳しく考えていく必要がある。伊豆の誇りとは何か、夢やこころざしはどのようなものか、心豊かとは人間性なのか、といった内容で、これが前回提言された子ども像を示す「伊豆っ子宣言」とどのような関係になるのかも含めて、検討を進める必要があるのではないか。菊地先生から指摘があったように、学校教育の前に家庭教育があり、地域の教育があり、かつては生涯学習といわれていた社会教育がある。生を受けてから死ぬまで、乳幼児期、少年期、青年期、壮年期、高齢期の各期があり、各期の目標を伊豆市で規定できるのではないかと考えている。



○いろいろなアンケートを見ると伊豆に対しては、自然が豊かである、心が豊かである、経済的な豊かさもある、といった意見が多く寄せられる。市長の名前ではないが「豊か」であることが伊豆の特徴ではないか。

○いろいろなアンケートを見ると伊豆に対しては、自然が豊かである、心が豊かである、経済的な豊かさもある、といった意見が多く寄せられる。市長の名前ではないが「豊か」であることが伊豆の特徴ではないか。

○心の豊かさを示す事例を紹介したい。7月に天城小学校の前の信号で停っていたところ、小学

校 3-4 年生の女の子二人が横断歩道を渡り終わったときに二人とも丁寧に頭を下げた。これはする必要はないのだが、とても気持ち良かったことをよく憶えている。もう一つは、これは土肥小学校に高齢の女性観光客が電話連絡をくれたのだが、朝の散歩中に通学途中の女の子たちが非常に気持ちよく挨拶をしてくれたことがとても嬉しかった、というお礼だった。こうした事例には、伊豆の人々の心の豊かさがよく表れている。伊豆市を訪問した人が、伊豆市は心豊かだなと思う、こうした人間の育成ができればと思う。

座長 ○伊豆市としてどんな子どもを育成するか、教育のあり方を考えるときに、前回、仮の名称で示されたのが「伊豆っ子宣言」である。このセッションでは時間的制約があるので、具体的な内容まで踏み込んで提言することはできない。通常はワーキング・グループを作って、そこで議論を詰めていく方法をとるが、このセッションでは宣言の中に盛り込みたい基本的な柱といったものを示すことはできる。たとえば佐藤さんが提案した「豊かな心」といった抽象的だが基本的な内容を盛り込むよう提言することはできる。



○子どもを対象にするのが「伊豆っ子宣言」ならば、大人の育成も必要なので伊豆市の市民像をつくるための提言も検討できる。

佐藤 ○学校教育目標が小中学校で統一されているので、これらを核にして、幼稚園、家庭、地域、子ども会活動などの社会活動で取り入れていけば、それほど時間をかけずに作れるのではないかと。一から検討を始めるのでは時間がかかってしまうので、すでにあるものを使っていけばいい。情報発信についても資料を活用していけばいいのではないかと。

座長 ○「平成 26 年度 伊豆市の学校教育」の中に示された[めざす子ども像]は、「ふるさと伊豆に支えられ、未来の夢の実現に向かって勉強や運動に励み、人や友達との関わりを大切に、力一杯生きる子ども」である。何度も指摘してきたが、ここでの人づくりは子どもだけでなく全世代が対象なので、全世代の人を対象にした人間像を設定していく必要もあるのではないかと。

○実際に力一杯生きているか、高校生に聞いてみたい。

梅原 ○それに追加してこの中にある「ふるさと伊豆」の誇りは何か、これについても高校生に伺いたい。

澤田 ○私は力一杯は生きていないが、だいたいはできていると思う。伊豆の誇りに思えるところは、都会にはない人のあたたかさ、人とのかかわりがまだあるところだと思う。

佐藤 ○多分、力一杯は生きていると思うが、夢や勉強となると、ちょっと。。。 (笑)先ほどもあったように、横断歩道を渡ったら挨拶する、人に会ったら挨拶する、こうしたことが自然に身についているところは誇るべきだと思う。

高田 ○私はカー杯生きている。大きい目標があるので、後で後悔しないよう、今全力を出している。伊豆総合高校の生徒会長である自分自身が伊豆の誇りだと考えている。



座長 ○ちょっと言葉を失ってしまった。。。 (笑)次の方はいかがか。

牛尾 ○私もカー杯生きている。地域の人とのかかわりが伊豆の誇りだと考えている。

座長 ○誇りについて自分に返して考えてみると、私は清水町在住だからかもしれないが、はっきりとした伊豆の誇りがあるとはいえない。誇るものがあったら世界遺産の富士山くらいか。。。人のあたたかさが誇りだとすると伊豆の人はそうなんだと思うが、清水町にはあてはまらない。

三浦 ○私はカー杯生きている。それはカー杯生きる教育を受けてきたからだと思う。私は中学1年生の時の野球部の先生と、高校1年生の時のバスケットボール部の先生にとても感謝していて、この二人からカー杯生きる教育を受けた。自分からカー杯生きているというよりもそうした教育を受けてきたことが大きい。

○ほかの高校生の方々より私は地域行事への参加経験が多いことから、私は和太鼓を誇りにしている。私は3歳ではじめてバチを握り、5歳で和太鼓を始めた。他の地域と違って伊豆市には自慢できる行事が多く、伝統がある。このことをとても誇りに思っている。

鈴木 ○私は高校に入ってからカー杯生きるようになった。誇りが何かははっきりわからない。

座長 ○すごく安心した(笑)。私でもよくわからないのに高校生にわかるはずがないと考えていたので。。。 (笑) でも誇りがあることは大事なことですごく羨ましいと思う。

南城 ○私はあまりカー杯は生きていない、結構、手を抜いているところがある。伊豆市の誇りは挨拶だと思う。

梅原 ○もっと他に、自然が美しい、狩野川がある、空気がおいしい、といった意見も出るかと思っていた。そうしたら話をしようと思っていたのだが、私は最終的に大事なものは人だと考えている。日本中でみれば、きれいな山はたくさんある、きれいな川もいっぱいある。私が人生の中でほか

の人に伝えたいのは、人間でよかった、地球人でよかった、日本人でよかった、伊豆の人でよかった、このように言える人になりたいということで、こうした人を創っていきたくて考えている。

○私は修高でレスリングを教えていて、子ども 2 人にもレスリングを教えている。子ども達には伊豆のこうした家に生まれたのだからレスリングをする、このように教えていて、先ほど指摘されたコミュニケーションという言葉についても、私はコミュニケーションには経験の共有が必要で、同じ経験をしなければ意味が理解できない、と考えている。こうしたことから子ども達にはレスリングをさせた。こうしたつながりを持っている、自分はこうしたところに所属して、そこで生きていく。所属することは安心であり、安らかさにもつながる。そうしたつながりが最終的には誇りに結びついていくのではないか。



座長 ○田足井さんから別のメモをいただいた。メモに沿って具体的な提言をいただきたい。

田足井 ○前回セッションで指摘されたのは、せっかくな活動をしているのに情報の発信があまりできていない問題だった。これに対して静岡県の現在の取り組みとして「ふじさんっこ応援隊」を紹介したい。伊豆市の広報誌などでイベントの紹介もされているが、応援隊は県の子育て会議で検討されたもので、子育てを応援していこうとする団体、企業、行政等の人々が誰でも個人として参加でき、現在 1000 人以上が県の窓口に登録している。情報発信がなかなか上手くできなかったために、誰が子育てを応援しているのか、わからない問題があったので、県でまとめることで応援していこうとする取組で、具体的には沼津・プラザヴェルデで「子育てフェスタ」が 9 月に開催される。すでに 107 ブースが埋まっているようで、参加者 1 万人を見込んでいる。ここまで大人数である必要はないので、伊豆市で子育てを応援する「伊豆っ子応援隊」といったものを作れないか提案したい。まとめ役は行政にお願いするか、あるいは窓口を担当したいと手を上げてくれる人がいればそれでもいいと思う。活動内容などを紹介して連絡できる窓口を設けて誰にでも登録をしてもらい、市のホームページや広報誌で紹介する、登録した仲間での広報誌を発行する、こうしたことができる。定期的な発信では FM IS も活用できる。沼津のフェスタよりも小規模でも、伊豆で皆が子育てで交流する機会を持つ、応援隊の伊豆市バージョンの創設を提案したい。



座長 ○今の提言は伊豆市で人づくりに関わる活動をつなげていこうとするもので、活動を支援する目的で具体的な提言として「伊豆っ子宣言」や「伊豆っ子応援隊」を創る、こうしたことは個人的にもおもしろいと思う。何年か前に県主導で子育てサークルのネットワークづくりに取り組んだが、立ち切れたように聞いている。これが「ふじさんっこ応援隊」に変わったのかもしれないが、もう少し本腰入れて、市全体で子どものことをよく知っている、こうした活動を構築できないか。菊地さん、子育てネットワークや子育てサークルの支援に関連した提言はできないか。

菊地 ○子育てサークルは母親同士のサークルになるが、私は、子どもについてきめ細かく対応できるのがこの伊豆市であることを情報発信することを提言したい。この提言は、あるものをできる

だけ活用して、あまりお金をかけずに、人の力を上手に使うことができること、との考えがもとになっている。伊豆市で子育てすれば、いろいろ教えてもらえる、すぐに情報が得られる、助けてもらえる、きめ細かく親切な町である、こうした町を志して、そしてその情報が上手く伝わることを目指したい。背景には、「もう少し早く知っていれば」という意見が多かったこともある。伊豆市では子どもに対する大人の役割について大人がよく理解している、子育ての専門家がタイミングよく寄り添えるシステムがある、そうなればこの町で子育てしたいと思う人が増えるのではないか。人数が少ない町であればこそ、できることもある。保育や教育の専門家ではなく、子育ての専門的知識を持った人を育てるのはどうか。伊豆市の大人は子どもへの理解に長けている、伊豆市は人を育てやすい場だ、そしてこれらが口コミ情報で広まる、こうした流れになっていくのではないか。

座長 ○先ほどの市長の話では、伊豆市では人口が減っていて、それは子育て世代の若い人の流出が多いということであった。では、どうしたら子育て世代にとって住みやすくなるか。これを経済や産業の問題ではなく、人の視点から考えるとどのようなことが言えるのか。一つのヒントは、菊地さんが提案した子育てをよく知っている人がいてタイミングよく相談できる町ということだったが、そのほかに子育て世代が住みやすい町になるためのアイデアとしてどんな提案ができるか。他の市や町の取り組みで、そうしたものがあれば意見や提言をいただきたい。

宮地 ○母親から出る言葉に「地元出身ではないので相談できる先がない」というものがある。相談できる先として支援センターがあるが、個人的な相談はしにくいということだ。前回も紹介したが、沼津にあるフリーペーパーのようなものが伊豆市にはなく、子育て世代が子どもとともに集まることができる場や核になるところがない。このとき核になるのは私のような孫育ての世代ではなく、若い世代の人になってもらいたいと考えている。このセッションに集まっているメンバーには伝達力があるので動いていくのではないかと期待している。自然がたくさんあっても子どもと二人だけで外出しづらい。数世代一緒に住んでいる人もいるので、そうした人に相談できるのもいい。相談先があれば伊豆市から出ていく人が減るのではないか。



○小さな問題だが子どもが病気の時の療養保育では、伊豆市の療養保育は有料だが、伊豆の国市では無料である。伊豆市に引っ越そうと考えた人が、このことで伊豆の国市に住んだ方がいいと判断したと聞いた。療養保育の無料化はできないか。

座長 ○伊豆市や静岡東部は動きが鈍いという指摘もあった。民間活力や一般の人々が動く力、こうしたものに期待する時代がきているのではないかと私自身は考えていて、母親がNPOなどを勝手に立ち上げてしまうところもある。それなのに、このあたりは文化として動きが鈍い。これを打開していく方策はないか。



宮地 ○まず、距離があまりに遠すぎるのが問題で、沼津、三島間であれば簡単に行き来できるが、伊豆市内であってもたとえば土肥は遠いという実感がある。また個人で対応できるのは少人数に限られるので、すべてを行政にお願いすることは難しくても、後援してもらっただけでも違う。行政にお願いするとどうしてもしほりが多いが、何者かわからない団体では信頼性がない。この点で行政にできることがある。

座長 ○子育てしやすい町づくり、あるいは子育て世代が住みやすい町づくりにつながるような提言はあるか。人材育成にこだわらなくてもいいので、何か提案をいただきたい。

青木 ○未来づくりセッションは10年後を見据えて議論を進めるもので、人材育成の観点から考えるということだが、せっかく高校生が参加しているので少し質問したい。3年生が多いので就職か進学か進路が決まってくると思うが、働き始めて伊豆市で普通に幸せに暮らしていくとしたら、最初のスタート時点でいくらかの収入があったらいいか、漠然とでもいいので聞かせてほしい。

澤田 ○自宅から通うのであれば、月収10万円くらいで大丈夫だと思う。

高田 ○多いに越したことはないが、伊豆市に住むとしたら月収30万円くらい欲しい。。。

鈴木 ○持越で暮らすならば月に20万円くらい。。。

青木 ○お金の問題から離れて議論をしてほしいという意見もあるが、私が敢えてお金の話に持っていったのは、何かをするときのベースにはやはり経済活動があって、これ抜きに考えることはできないからだ。先ほど佐藤さんが「中伊豆でほのぼのと暮らしたい」と言ったことがとても嬉しかったが、実は私は中伊豆でほのぼのと暮らしている。資料の中に「年収500万円モデルを目指そう」という内容があるので、将来親になって子育てするときに大人はこのくらいの金額が必要だと考えている。ベースとして必要な金額だが、伊豆市で暮らしていくのであれば500万円なくても暮らしていけるかもしれない、このような考え方もできる。

○人づくりでは、ふるさと伊豆に人を育てる力があるか、が問題で、それには、地域力、経済力、

生活力といったものが基盤になる。これらを基盤にした上で、地域のつながりや人のあたたかさがある。FM IS である方が、「伊豆の人は 8 割がいい人です、残りの人はもっといい人です。」と紹介しているのを聞いたことがあるが、伊豆は生活面で恵まれているともいえ、外から来た人もおそらくこのように感じているように思う。

○それぞれは良い活動をしていて、それが人の好きにも表れている。それなのにネットワークが弱い問題があって、これからの 10 年を考えるのであれば、活動をつなげていく、これしかないのではないかと。私は議員として行政と関わっているので行政がこれからしようとしていることを少し詳しく知っているが、そこで必要だと思うのは、地域でまとまって子育てするしくみづくりである。組織ならばリーダーに頼ることになるが、これからはしくみで動いていく。そこで出てくるキーワードが「コミュニティ・スクール」¹学校づくり



り地域協議会(学校運営協議会制度)といわれるしくみで、これに収れんするのではないかと。この中には、自治体、観光会、商工会、各種団体、PTA、地域老人クラブなど、多くの人々の伊豆市のための活動がすべて含まれるが、コミュニティ・スクールを実現するには人々が連携する事務局づくりが必要で、皆さんがそのしくみに加わればよい。その中で大人も地域力をもう一度取り戻すことができる。結束力を持ってコミュニティを再生し、子どもも育てる、そうしたしくみができればいいのではないかと。

座長 ○コミュニティ・スクールの構想はアメリカで始まって日本でも広まりつつあるが、地域社会の弱体化があって課題が多いと聞く。伊豆市をベースに立ち上げようというのは期するところがあるように思う。

青木 ○伊豆にはそれほど頑張らなくても何とかになってしまう地域性があったが、これからはそれぞれが頑張るだけでなく、助けあわないとやっていけない時代になる。一つ言えることは若い年齢層の数が絶対的に少ないことがある。今までどおりやっていただけでは上手くいかない。大人が頑張って、子ども達との関わりの中で大人が学んだり変わっていかねばならない。その時に今までのように個々に取り組むのではなく、大人同士が一緒になってやっていく場が必要で、目的を共有して新しい価値観を持って取り組んでいくことが必要になる。これらがないと 10 年後になってもまだ旧 4 町がバラバラといった問題が残ってしまうことになる。

座長 ○それをどのように作っていくか、10 年後は先だからとっていると案外早くて、気がつくとも何も変わっていないということになりかねない、こうした事例をいろいろなところで見てきた。どこに教育のあり場所をつくるのか、それに向けて主権者である伊豆市民がどのように動いていくのか、これらについて考えなければならない。先ほど学力テストの公表にどれほどの意味があるのか、といった問題が市長から提起されたが、市が直接関わる小中の義務教育段階での教育の質について何を論じていったらいいのか。次回の議論につなげるために伊豆市では教育の質をどのように捉えるのか、また伊豆市の教育の質を高めるために何をしていたらいいのか、これらについて順に発言いただきたい。

¹ コミュニティ・スクールについては文部科学省のサイトが詳しい。 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/



原 ○敢えて言わせてもらすと、私は成績発表は大いに結構という立場で、それによって切磋琢磨すればいいと考えている。運動では学校ごとの対抗戦があって勝ち負けが明らかになるのに、学校の成績を公表しないのはおかしいと考えている。ただ、それだけがすべてではないことは押さえておかななくてはならない、このような考えである。

澤木 ○学校の成績はデリケートな部分もあるので、私は原さんとまったく同じではないが、その子が自分の中でどのように高めていくかを教えるためには公表も必要だと見ることが出来る。あくまで個人的な考えだが、子ども達が切磋琢磨していくには公表も一つの方法ではないか。

○高校生の発表を聞いて安心したのは挨拶ができることで、それは人間として最も基本的なことだと考えている。伊豆市で育つ子ども達に一番持ってほしい、伊豆ならではの基本は伊豆半島に対する気持ちである。教育は集団の中で高めていくもので、人に教わり人に学ぶことが最も大切なことだと考えている。今日は私も高校生から学ばせてもらった。このように大人になっても人から学ぶことも多く、学ぶ心を持てる伊豆市の教育にしたい。



梅原 ○現在、伊豆市教育委員をしている。私は教育の根底にあるのは家庭教育だと考えている。三つ子の魂百までと言われるように、一番の基礎はやはり家庭で作らないと学校に入ってから矯正したり、いい方向に持っていくことはなかなか難しい。基本的な人間としての最低限のものは家庭で学ばせ、しっかりしつけをしていく、人に何かを教わるという態度も家庭でしっかり教えていかなければならない。先ほどの高校生の話を聞いていても親とあまり話をしていないのではないかという印象を受けた。家庭の中でもっと会話をして、自分の親が何を考え、どのような知識を親から広げることができるのか、こうしたことを再確認する。社会全体が裕福になって高校生でも自分の部屋を持っている人が多いと思うが、私の時代は自分の部屋はなく、家族と一緒にテレ

ピを見て一緒に生活観を体感してきた。最近ではこうしたことがなくなって、気に入らないことがあると自分の部屋に入ってしまうが、これはいけないのではないか。互いに話をして親の雰囲気を感じる、こうした育て方が最も重要だと私は考えている。こうしたことが伊豆の風土にも合っていると思うので、こうした教育をするのはいかがか。

○最近では大人が、何が悪いといったマイナスの話しかしなくなっているように思うが、「こうしていいよ」と親が肯定的な話をすることがとても大事だと私は考えている。こうした話を親がしっかりしていく、これが大切な教育なのではないか、と常々思っている。

田足井 ○私が関わっているおもちゃ広場は単におもちゃを置けばいいというものではなく、母親同士が話をしたり、母親と子ども達とがコミュニケーションが図ることを目指している。まずは子育て時代にしっかりつけて、親子関係がしっかりできた上で、次にステップアップしていく時間を設けるようにしている。その上で地域があって、人との関わりの中で育っていくことが大切で、最終的には「生き抜く力」を身に付けられればいい。学校も大切だが、親から学ぶことが大きく、そして自分一人で生きていくために必要な力について学ぶことだと思う。

宮地 ○皆さんと同じように家庭生活がとても大事だと思う。私は子育てをする中で、送り迎えの時間が会話の時間になったことで不便さがかえって良さになった。男の子はあまり話さないと聞くが送り迎えの時間にはとてもよく話してくれた。会話をすると、友人関係もよく見えるし、友人を知ることでもできて、よその子も自分の子のような感じを持つことができる。それが地域のつながりになっていく。勉強も大切だが、スポーツで身体を鍛えておけば弱いところがでた時にも補える。以前に上に進学できる高校をという提案もあったが、これができる地域に帰ってこないのではないかと不安がある。一方で、なりたいものがある時になれるよう育てられる地域にしていく、こうしたことも大切ではないか。

佐藤 ○学力調査では、点数を上げようと思えば上げられるし、教師の教え方には反省すべき点もあるが点数が悪かったからといってそれが問題だとは考えていない。子どもが生きる力をつけていければいいことであって、点数が悪かったから公開する、これではいじめをしているようではない。活用の方向をきちんと決めなければいけない。

青木 ○教育の質についての答えはひとつではないと考えるが、人間は総合力だということが一つある。ここで一つの言葉を紹介すると「人の教育は、家庭で芽を出し、学校で花が咲き、社会に出て実がなる」。家庭の教育はもちろん大事で、学校教育も大切で、社会に出て上司や親方から教わってはじめて人として社会の中で一人の人間ができていく。私には、伊豆で生まれて専門学校を出て伊豆を離れて東京で働き始めた娘がいるが、社会の中で一人の人間として幸せに充実して暮らしていればそれでいいと考えている。漠然とした答えだが、結局は、人間は総合力だということだ。

土屋 ○皆さんの指摘のとおりで、家庭、地域、学校、それが子世代に続く。私は地域の中でクラブチームを立ち上げて何ができるかを考えながら活動しているが、家庭の中で子どもが生まれた時に、親として勉強すべきだと考えている。小さいうちに父親を亡くした友人が、大人になったときに自分の父親は自分をどうやって自分を育てたのか、疑問を持ったという。それでも自分なりに

考えて子育てして順調に育てている。この点は母親でも同じではないか。また他人の子どもを預かることがあるが、そのときに気を付けているのは外的にも精神的にも傷つけてはいけないということで、最終的には元気よく育てばいいと考える。

○今日、三浦君の話を聞いて勇気もらったが、私も野球をやってきて、それが人づくりや地元球児を育てることにつながればと思う。私も教師になりたかったが実現しなかった。それでも今でも、何かできないかと思っている。三浦君には頑張って、是非、教師になってほしい。



菊地 ○教育の質に関しては、いわゆる学力に関する教科教育は当然のことなので、それは専門の先生方に任せる、あたりまえの基本と捉えている。本日の話を聞いて思い浮かんだのが、幼稚園教育の5領域である。幼稚園は教育機関なので幼稚園教育要領があって、健康、言語、表現、環境、人間関係の5領域が定められていて、これに則って教育が進められている。これまでの話を聞いていて、これら5領域すべてがあてはまると感じた。伊豆市の5領域を考えるならば、「年齢相応の」をつければいいのではないかと考えている。

佐藤 ○かつてはギャング・エイジとして3歳児がわんぱくだと言われていたが、最近では発達が進んで2歳くらいになっている印象がある。子どもの発達段階についてはいかがか。

菊地 ○ギャング・エイジは私の中では小学校4年生くらいだと思っている。アメリカでは2歳児を「恐ろしい2歳児、とんでもない2歳児(terrible two)」と呼んでいるが、2歳くらいで自我が出て反発するので、反抗する。3歳児には3歳児なりのギャング(的要素)があるので、どちらもギャングがあって、それは発達が早まっているのではなく、表現の仕方の問題だと考えている。

座長 ○発達加速化現象として発達時期が早まっているという指摘もある。身長伸びや体重の増加などがあって、これら身体の発達は30年前よりも進んでいる。ただ精神的な発達では、必ずしも前倒しになっているか判断できない。大人の目で見ると反抗期というが、子どもは反抗しているわけではなく、自分の頭の中ででき上がってきたものを、自分なりに素直に表現しているだけに過ぎない。私達が子どもだった頃と比較するとさまざまな刺激があるために、子どもの表現の仕方が変わっているだけで、それで見かけ上、反抗期が早まっているかのような見方につながっているのかもしれないが、本質的なものは変わっていないと私は考える。

○大人が勝手に反抗期と呼んでいるが、嫌ならば嫌が言える反抗期は人間の発達の上、きわめて重要な時期である。これが言えない子どもは必ず後で歪みが出る。嫌が言えるのは自分ができてきた証拠で、私は冗談で「お赤飯を炊こう」と言っているくらいで、こうした捉え方をしたい。大人が勝手に反抗期と呼んでいるのは反抗ではなく、「自我の芽生え」と捉えられるもので、中学生以降に表れてくる第二次反抗期にも同じような意味がある。このように考えていくと、菊地さんが指摘したように、子どものことをもっときちんと知ろう、このことにつながる。

○この個別セッションで残されているのは次回、あと1回で、まとまるのか心配もある。このセッションでは、1)現状認識、2)問題提起、3)提言、ができればいいので、伊豆市の人づくりのために何

ができるか、次回はこうした提言をいただきたい。

○今日は、高校生の貴重な意見をいただけて嬉しかった。大人だけで議論していても仕方がないというのが私の持論だったので、セッションの時間を共有してもらってとても感謝している。3回目もあるので、これに懲りずに誘われなくても高校生には来ていただきたい。ありがとうございました。

